

# 大学での死の教育：哲学的観点からのアプローチ

市 沢 正 則

## Talking about Death in the Classroom : Creating a Philosophical Framework for a Discussion about Death

Masanori Ichizawa

はじめに

I 子どもと青少年を取り巻く死の状況

II 哲学の授業における「死の教育」

1 授業全体を貫く方針

2 「死」に関連した内容

3 「死」を考える

おわりに

はじめに

「多くの人は死に対して無防備である・・・自分の死について一度も思い巡らせたことがない人が末期の癌のような死に至る病気になった時、備えができていない分、恐れや混乱が強くなる。」<sup>1</sup> 柏木哲夫医師はホスピスで2000名の方の死を看取り、患者や家族との交わりから「死を学ぶ」ことで、「死の教育」、すなわち「死を教える」ことの重要性を認識するようになったという。しかし、死の教育の普及に努力しているアルフォンス・デーケン氏は「私たちは入学試験や就職といった人生の重要な試練に望む前にはかならず教育や訓練によって準備を整えるが、人生最大の試練であるはずの死に対して、何の

準備も行わない」と、日本での死の教育の必要性を訴えている。<sup>2</sup>

「死の（準備）教育」という言葉は最近日本でも聞かれるようになった。その目的は「死そのものを前もって個人的には体験することはできないが、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得すること」である。<sup>3</sup> “memento mori”「死を想え」という考えは西洋では中世からあり、人々は死を強く意識していた。学者は書斎の机に頭蓋骨をおいて研究したという。日本でも最近は生涯教育などで「死」について学ぼうとする機運が出てきている。本稿では筆者が本学の『人間と哲学』の授業で「死」についてどのようにアプローチしたか、又、その授業の内容を紹介する。最初に、学生が本学に入学するまでに育ってきた日本の社会・学校での死を取り巻く状況（死との出会い、学校のカリキュラム、死についての意識、死の準備教育へのアドバイス）に触れてから、本論に入る。

## I. 子どもと青少年を取り巻く死の状況

### 1. 死との出会い

日本人の死は家庭から病院へと移っている。1947年に91%が家庭で死を迎えたが、1990年には病院での死が93%になった。<sup>4</sup> その結果、死に逝く人とその周りの状況がどのように変化したかを柏木氏は現代日本人の死の問題として取り上げている。昔は死に逝く人は家族に囲まれていたが、現在は集中治療室で多くの機械に囲まれて、家族の付き添いが許されないまま、孤独な死を迎える。また、家庭での死は家族が死に逝く人の変化を自分の目で確かめ、家族同士で悲しみを分かち、思い出を語り合う情緒的な死であったが、病院では人の死が検査結果の数値で測定され、死への過程や死そのものは医学的にのみ処理される科学的な死になった。死者を看守の機会がない現代の日本社会において子どもや青年がみる死は生身の死ではなく劇化された死になった。ある一週間の午後6時から9時までのテレビ番組を観て、どれほどの人が死ぬかを調査したら557人の死者が出たという調査結果がある。一つ一つの死に情緒が伴わず、物体が無くなるように死が扱われる。虚像の死しか知らない者が何の心構えもなく、現実の死に向かい合う時、それを病的に否定し、パニック状態になったりするという。<sup>5</sup>

このように死は日常生活から遠のいてしまい、死という現実を身近に経験しなくなっ

たゆめに、死は自然に学ぶのではなく意識的に学ぶことが要求されてきた。

## 2. 学校でのカリキュラム

子どもたちが日常生活の大半を過ごす学校では死についてどのようなカリキュラムが準備されているのだろうか。文部省が定める「学校教育法」を要約をする。

小学校では「自主及び自律」「国際協調」の精神と、日常生活に必要な「衣、食、住、産業等」「国語」「数量的な関係」「自然現象」を処理する能力を養い、「心身の調和発達」を図り、「音楽、美術、文芸等」について基礎的知識の理解と技能を養う。中学校では「国家及び社会の形成者として必要な資格」「将来の進路を選択する能力」「公正な判断力」を養う。高校では「国家及び社会の有為な形成者として必要な資質」を養い、「一般的な教養を高め、専門的な技能に習熟」させ、「個性の確立」に努める。

「教育基本法」における教育の目的は「人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行なわなければならない」とある。死の問題が関係する宗教教育については「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない」としながらも、「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他の宗教活動をしてはならない」とある。叢書「死の準備教育の場とそのあり方：教師教育」の中で、坂上正道氏は「学校教育法」「教育基本法」では、死についての教育はカリキュラム上ほとんど取り扱われない、と述べている。<sup>6</sup>

しかし、別な見解もある。オウム真理教団による地下鉄サリン事件では、大学院生や医者が多く関与していた。そのため、「日本で哲学と宗教を教えてこなかったから」で<sup>7</sup>、教育界にも一部責任があるとの意見に対して、高等学校長で、全国高等学校倫理社会研究会会長の御厨良一氏は次のように反論する。学校教育で欠かせないことは、多くの青年が死の不安に怯え、どのように生きるべきか悩んでいる事実に対してどう答えるかで、哲学の課題でもある。また、「気軽にかつ真剣に死を考えるのも哲学」である。教育の現場では、不十分と言われながらも行ってきた。しかし、必修科目の『現代社会』、『政治・経済』、『倫理』の授業は行ったことにして、その時間を受験科目の『世界史』、『日本史』の授業にあてている進学校もある。入学試験にこれらの科目を採用している大学はごく

わずかで、試験科目でなければ、生徒は真剣に学習しない。受験エリートからカルト宗教に走る者が多くでるのは当然である。<sup>8</sup> 最近では各学校、個人の教員が様々な形で「死を考える」教育を取り入れているようであるが、御厨氏が述べるように、「死の教育」を行う適当な科目があるが、実行できない複雑な事情があるようだ。

### 3. 死の意識

このような中で育った子どもたちは死についてどのように意識し、考えてきたのだろうか。3歳から5歳になるまでの間に筆者の娘が死を体験した過程と死についてどう理解したかを紹介し、幼児（5歳児）・小学生・中学生についてのある調査報告を要約する。

娘の体験～3歳：小鳥の雛、金魚3匹は数日で死に、亀を与えると、毎日「まだ死んでないよ」と言いながら観察する（死についての理解はほとんどない）。4歳：モルモットが1年後に死ぬと泣きじゃくる。祖父の写真を見て「おじいちゃんはどうしたの」との質問に「年にとって死んじゃった」と答えると、「可愛そうに」と泣き出す（死が別れであり、身近かな者や動物の死を悲しく思う）。4歳半：電車で老婦人からチョコレートをもらうと、「あのおばあちゃんいつ死ぬの？」と尋ねる（老化が死をもたらすと理解する）。「疲れた。お父さんも年とったな」と言うと、泣きそうになり「年にとってないよ」と声を高める（死を否定する気持ちが起こる）。

幼児が生命についてどんな見方をしているかでは「生きている」と認識するものの割合は蛙・鳥はほぼ100%、人間85%、チューリップ42%、ロボット39%、木37%、雲10%、山7%、「動物はいつかは死ぬ」（78%）、「人間はいつかは死ぬ」（52%）である。植物を「生きている」ものとして認識しない理由は「動く・動かない」など目に見える特徴や、「手足がある・ない」という形態的特徴による。死に対する感じ方・考え方では「死ぬのは嫌だなあと思ったことがある」（76%）、「死ぬのは怖い」（86%）、「動物の死と人間の死とではどちらがかわいそうか」の質問では「動物」（52%）、「両方」（26%）、「人間」（21%）と、約半数の子が「動物」と答えている。幼児期における「生と死」に関する意識は未確定の段階であるが、多くが死への恐怖や不安を感じ、考える。<sup>9</sup>

小学校2年生になり「動物はいつか死ぬ」（96%）、「自分もいつか死ぬ」（97%）と生命の有限性についてはこの頃確立する。死に対する感じ方・考え方では「死ぬのは怖い」は学年を問わず小学生では80%。死後の世界のとらえ方では、「死ぬと天国か地獄へ

行く」などの彼岸型が一番多く、「死ぬと赤ちゃんになって生まれてくる」などの再生型、「死ぬのは眠っているのと同じで、また目がさめる」などの復活型の順になる。生まれ変わりたい理由で最も多いのが「やりたいことが多く、何度でも生まれ変わっていろいろやりたい」という現世の肯定、次に「今よりもっと良い生活がしたい」など現世に何らかの疑問や誤りを感じ、やり直しを望む。「最近1年間に死にたいと思ったことがあるか」の質問に対しては3～6年生の平均は20%以上が「思った」と答えている。その理由として、家庭に起因するもの、友人、学校の順である。<sup>10</sup>

「自殺は絶対ゆるされないことであるか」との問に対して中学生の60%はそう思うと答えている。逆に、中学生の40%は自殺に対して肯定的な考えを持っている。自殺の直接原因は多い順番から、学業不振や友人関係など学校での問題、男女問題、家庭問題、病苦、身体的劣等感である。自殺の時期は学期や季節と関係があり、休みの始まる7・3・12月は少なく、最も多いのは9・4・5・1月の順となる。<sup>11</sup>

#### 4. 死の準備教育へのアドバイス

上述の時期における子どもへの死の準備教育として各専門家はどのようにアドバイスしているのだろうか。

前述の「生と死」の意識調査に加わった宮本佑子氏は親の役目を次のように記している。身近な人に死なれた時の気持ちを幼児に聞くと、「悲しくて泣いてばかりいた。もう生き返ってこないと思うと、もった優しくしてあげればよかった」という死者への追悼、「べつに、悲しくはなかった」と感情さえ伴わないという2つに大別できる。その観点から、幼児教育と親の役割は、子供たちが人との死別を実感、経験する機会が少なくなる分、できる限り幼児期から動物の飼育や植物の栽培を通して死の体験をさせること、病人や身近な人との交流を積極的にもたせることである。<sup>12</sup>

小学生になると、いじめ、自分の性格や生き方が嫌で死を考えるようになる。神経は過敏であるが、感情の抑制ができず、忍耐力が乏しく、未成熟なため、人格を発達させる必要がある。知育教育と徳育教育のバランスをとり、家庭や地域で役割を与え、対人関係を多くし、異年齢児を含めた子ども同士の交流の場を増やす。また、生命の貴重さ・限界・醜さを知らせるため、動植物の接触を通して、生物の構造・生命の神秘を学ばせ、死を体験させるように、稲村博氏はアドバイスする。<sup>13</sup>

中学校では成績、人間関係が精神的な圧力になり死を求め、現実では満たされない何かを実現しようと、自殺を企てる。自殺の心理学的原因の第1は、自我に目覚め、他との交わりを避け、自己の世界に埋没し、極度な自己愛の追及の結果、死を美化し、永久性のある世界を求める。第2は、他者によって枠づけられた価値観の中で自己の存在価値を見い出そうとするが、入試などの失敗で親の支持を失うことを恐れ、自己を捨てる。友人・家族・教師などと相談ができて、「自分は生きるに値する人間である」ことを自覚し、人生に希望と価値を見い出し、困難に屈しない粘り強い精神力を育むことができる状況をつくるようにと平林進氏は勧める。<sup>14</sup>

高校生は家族から自分を切り離し、家庭外の人物や価値観に関心を移し、自分とは何かを確立する。同時に肉体的成熟と社会的な関心との狭間で歪みが生じ、知識偏重の社会でアイデンティティが未熟のまま知識肥大が進み、心身症になったり、暴力を起こす。これらの問題を抱える高校生に次の点について周りが努力するように、河野博臣氏は忠告をする。1) 不安と危機の克服：人生の問題、生と死、人間とは何かを自分自身の問題として考えさせる、2) 親からの分離体験を通してのアイデンティティ確立への援助：子どもは親に依存しながら成長し、反抗期・分離体験を経て、尊敬する人に自我を同一させながら自己を確立する。その間の苦悩を援助できる時間と場所を提供する、3) 親子の共感的な体験：親子の分離体験で心理的死を味わい、その悲哀をお互いが体験することによって、家族・親子の問題を学ぶ、4) 性の問題：肉体の成熟とともに生ずる性衝動・性本能を生理的、人格的なレベルで教育する。これがなされると、非行、対人恐怖・心身症、自殺など、病気や欲求不満症による暴力、行動異常を起こす、5) 愛を学ぶ：異性愛と友愛を学ばせる、6) 人間は自然の一部で有限：スポーツなどを通して自然と親しみ、自然の中での生と死、有限性に気付かせる。<sup>15</sup>

## Ⅱ. 哲学の授業における「死の教育」

ここでは本学の共通教育科目『人間と哲学』の授業でどのように「死」についてアプローチしたか、又、主な授業内容を紹介する。多くの学生は前章で触れたように幼児期から本学に入学するまで死に対するなにかしらの意識は持ち続けているが、それをどのように表現してきたか、又は、表現せずにきたかは様々である。小学校から高校にかけ

て、特に高校時代は疾風怒涛の時期、自然や動物と親しみ、友と語り、社会に貢献したと思う時期でもあっただろう。しかし、生と死を体験的に学び、自然と社会の中で自分のアイデンティティを確立する時間があまりにも少なかったと思う。この授業で、古今東西で死を体験したり、見つめてきた人々の言葉を紹介することにより、学生が死を意識し、「生きることの意味」を考えるきっかけになることを望んだ。

## 1. 授業全体を貫く方針

哲学の授業全体を貫く方針として次の2点を強調した。

1) 慣習にとらわれず、外見に惑わされずに物事を問い正す：現代の若者を示す代名詞、「指示待ち人間」という表現があるように、自分から考え、発言、実行することがほとんどなかっただろう多くの学生に、身近な事柄について慣習として考えられていることでも疑問を持つことを勧めた。そして、デカルトが言うように、いかなる大家の説であれ、自分にとって「疑いを入れる余地の全くない」ほど「明晰かつ判明」であるもの以外は一切受け入れないという態度で臨み、哲学する条件を次のように提示した：すでにあるものの枠組みを鵜呑みにせず、できるだけ前提がないところから「自分」で考える。そのために習慣的な考えに逆らって考え、心底納得のいく答えが得られるまで「どこまでも」考え抜き、もうそれ以上問うことができないところまで徹底的に問い詰める。<sup>16</sup>

短いテレビコマーシャル作成のために、企業では心理学者などの専門家を雇い、消費者にいかにか訴え、広告品を良く見せて、ものを買わせるか研究させる。その結果、我々は中味よりもイメージでものを買い、失敗する例がある。皮肉だが、児童殺傷事件を起こした神戸の中学2年生の手記「懲役13年」の内容にも我々が学ばなければならない事があると思う。「大多数の人たちは魔物を、心の中と同じように外見も怪物だと思いがちであるが、事実は全くそれに反している。通常、現実の魔物は、本当に普通な“彼”の兄弟や両親たち以上に普通に見えるし、実際、そのように振る舞う。彼は、徳そのものが持っている以上の徳を持っているかの如く人に思わせてしまう・・・ちょうど、蠟で作ったバラのつぼみや、プラスチックで出来た桃の方が、実物は不完全であったのに、俺たちの目にはより完璧に見え、バラのつぼみや桃はこういう風でなければならないと俺たちが思い込んでしまうように。」<sup>17</sup> C.S. ルイス著の『悪魔の手紙』の中で悪魔のおじ

が甥に、悪魔業を教える。「われわれの方策は差し当たって自分たちを隠しておくことである。」<sup>18</sup> 悪魔の存在に人間が気がつけば警戒するから、お前の存在を分からせないようにして物事を進めなさい、ということだ。「兄弟や両親」以上に普通である人間に潜み、思い通りに事を運ばせれば合格で、怪物と思われ、正体を見破られれば、悪魔業失格である。人間は常に新しい物、きれいな物を欲しがると、外見に惑わされるという弱点があるようだ。それをうまく利用して悪魔は人間を最終的には破壊に導くというプロセスがこの2つの話の共通点だろう。

2) 見方を変える：ものの見方を変えることによって価値観が変わること、また、知らずに正しい道から足を踏み外す場合もある。広大な砂漠の中で人が迷うと、真直ぐ歩いているつもりでも、心臓が左にあるため、左回りをする。迷える人が自分の前にある足跡を見て安心するが、実は自分が辿った足跡だということもある。熱したお湯が入っているバケツに蛙を入れると、すぐ飛び出すが、水が入っているバケツに蛙を入れ、水を徐々に熱しても、蛙はそのバケツから出ず、死んでしまうという話がある。三角形の頂点になっている点は、見る向きを変えれば、底辺の点にもなり、底辺の点は頂点になる。「優秀」とは「すぐれていること」と辞典にはあるが、何がすぐれているかは書かれていない。「優」を分析すると、「人」「憂」で、「優秀な人」とは「人を憂えることに秀でている人」とも考えられ、我々が日常使う意味とは違って来る。上の例は、自分では気付かず違った方向に行っている、違った角度からものを見れば今までの考え方とは正反対にもなる、ということを示唆している。

## 2 「死」に関連した内容

シラバスに記述した授業全体の内容は次の通りである。「生まれてくると同時に死ぬ運命にさらされている我々、その間、我々は様々なことを考え、経験する：愛、幸せ、仕事、人間関係、いじめ、殺人、死後の世界、生きる意味、等々。偉大な哲学者達はこれらをどのように考えてきたのか。そして、あなたは？このコースでは、我々の日常の出来事に関連づけながら、上述の問題を取り上げ、生きることの意味を探究する。」

最後の授業（第14回目）で「生と死」というタイトルで死を取り扱った。ここでは、それ以前の授業で取り扱った「死」に関連する事柄を紹介する。



## 1) 時間と永遠：幸せ・愛・知恵の観点から考える

C.S. ルイスは西洋思想で考えられた「幸せ」の概念を3つのカテゴリーに分けた。アイスクリームを食べて幸せに感じるなど肉体的なものは「快楽 (Pleasure)」、人に会えて嬉しい、友人を得て幸せだなど感情的なものは「喜び (Happiness)」、道に迷ったときに道標を得たような心からの喜びは「歓喜 (Joy)」である。

パスカルは愛の種類を3つ (王様=身体、天才=精神、聖徒=霊) に分け、次のように説明する。精神的な人々 (天才) の偉大さは王や、富者、将軍といった肉体的に偉大な人々には見えない。彼等は自分の王国、輝き、勝利を持ち、肉体的な偉大さ (王様) を少しも必要としない。聖徒たちはまた独自の王国、輝き、勝利を持ち、肉体や精神の偉大さを必要としない。聖徒たちは神と天使からは見えるが、身体と精神からは見えない。

聖書は、知恵を3つに区分する。「家は知恵によって建てられ、悟りによって強くせられ、また、部屋は知識によってさまざまな尊く、美しい宝で満たされる。」<sup>19)</sup>

上記3つの概念 (幸せ、愛、知) はそれぞれが3つに区分されているが、違いはどれだけ長く持続するかである。肉体的快楽は瞬間に終り、権力を持つものは必ず倒され、流行は廃れ、部屋や家はいつかは壊される。これらは地上の世界では歓迎されるが、いつかは消失 (死へと向かう) する。しかし、人生の道標を得る、人・神 (もし存在すれば) を愛する、悟りを得ることは具体的に見えないもの、理解するには難しく、行うに難し、存在してないかのようなのであるが、生きている間に徐々にでも獲得すれば、そして、死後の世界が存在すれば、死後も存続する可能性がある。これらの概念を提起することにより、目には見えないが存在するものがあるのかも知れないという事を学生に考えて欲しかった。

幸せ・愛・知の持続時間

永遠的観点から この世的観点から	時間（死） ← 見える（生） ←	→永遠（生） →見えない（死）	
ルイスの幸せ	快楽（肉体）	喜び（感情）	歓喜（心）
パスカルの愛	王様（身体）	天才（精神）	聖徒（愛）
聖書の智	知識（装飾品）	知恵（家）	悟り（土台）

## 2) 生き方の選択：マルクス・キルケゴール・ニーチェ

科学の進歩、産業革命により19～20世紀の西欧は社会構造の変化があり、価値観も揺らいでいた。この時代に生まれたマルクスは、人間らしく生きる生活を奪った資本主義社会を崩壊し、失われた人間生活を社会改革により取り戻そうと奔走した。キルケゴールは、世俗化したキリスト教世界を批判しながらも、神を信じ、一個人の内的改革で神との結合により人間が本来あるべき姿に戻ることを主張した。ニーチェは、人間を萎縮させ、従順な奴隷にしたキリスト教道徳を批判し、人間は自らの価値を創造して強く生きるのだと力説した。3者の違いを別な言葉で表現すると次のようになる。マルクスは社会改革（社会階層の死）で今まで疎外されていた自分が人間らしく生きる、キルケゴールは神への信仰により新しい自分（古い自分の死）を求め続ける、そしてニーチェは今までの古い価値観を捨て（神の死）、新たな強い自分を創り出していく。学生が生き方の選択をする際に、20世紀を代表するこの3人の思想を参考にしてもらいたかった。

### マルクス・キルケゴール・ニーチェが考える病める人間の回復方法

	マルクス（1818～1883）	キルケゴール（1813～1855）	ニーチェ（1844～1900）
病名	疎外（自己から疎遠）	罪（神との離別）	価値の喪失（神の奴隷）
患部	全社会	個人	個人
症状	焦燥感	絶望	虚無感
結果	人間性の喪失	永遠の死	人間の萎縮化
原因	歴史の必然性→労働の分化	サタンからの誘い	人間の弱さ→神に従順
処方	人間への信頼→社会改革	神への信仰→自己改革	価値創造→自己改革
回復	人間らしさを取り戻す	救いによる神との結合	進化によるスーパーマン

## 3) いじめを考える：「個人の死＝社会の成長」という観点から

学生の70%以上は、いじめたり、いじめられた経験をもち、いじめを見てきた。いじめは日本特有のものではないが、日本人は集団行動をよく行うため、多く存在しているようだ。いじめにあい自殺した中学2年生大河内清輝君の遺書全文を学生に読ませ、自殺に至った過程を考えさせた。仲間の4人から催促されたお金の額はエスカレートしていった。いいなりになり、「使いばしり」にされたのが自殺の原因だと書いている。家族

への言葉には「お金をとっていた人たちを責めないで下さい。僕が素直に差し出してしまったからいけない」「僕はこの世からいません。お金もへる心配ありません。一人分食費がへりました。おかあさんは、朝、ゆっくりねれるようになります。・・・いつもじゃまばかりしてすみませんでした。死んでおわびいたします」などがあった。<sup>20</sup>

心理学者エーリッヒ・フロムは正常・健康を社会と個人の立場から定義している。ある社会の中で役割を果たし、要求されている流儀に従って働き、再生産に参加できる人間は正常・健康である。個人の立場からは、個人の成長と幸福のための最上の条件を求めている人間は正常・健康である。しかし、二つが常に一致することは現代社会ではほとんどない。多くの精神病学者は社会の構造を肯定しており、社会に適応できない人は価値のない存在であり、適応できる人は価値のある人間と考える。逆に、社会に対応しているという意味で正常な人間は、社会に期待される人間になろうとし、その代償に自己を捨てる。<sup>21</sup>

大河内君の場合の「社会」はいじめた4人のグループであり、この4人が規則をつくり、それを慣習化させる。社会の流儀にしたがって働く、すなわち、このグループの利益のために再生産（お金を稼ぐ）に参加することで、価値のある、よき働き手となる。従わなければ、罰せられる。個人としては不健康であるが、グループから見れば正常である。彼は個人の正常さを求めて、グループを否定したのではないだろうか。

学生は今後所属する学校、家庭、会社、団体、地域社会で、ある事柄について自分を主張するか、相手（集団）の立場を重んじるかの板ばさみになるであろう。彼女たちが個人の人間的成長と社会の成長を考える時に、常に何が正常であり、異常であるのかを認識し、また、両者のバランスの大切さを熟慮してもらいたかった。

#### 社会と個人の立場から見た「死と成長」

	社会の立場から	個人の立場から
社会に追従＝自己放棄 （自己の死＝社会の成長）	正常（社会に適応・価値あり）	異常（人間的に不健康）
社会に不追従＝自己探究 （自己の成長＝社会の死）	異常（社会に不適応・価値なし）	正常（人間的に健康）

### 3. 「死」を考える

#### 1) 「死を教える」前段階として

最後の授業で、直接「死」について考えた。その一週間前に学生には2つの課題(記名)を与えておいた:(1)あと2週間で自分の人生が終わるとしたら、あなたは何ををすると思うか、また、その理由も書く、(2)「死」について、あなたはいつ頃から意識するようになったか、また、「死」についてあなたが思うことを自由に書きなさい。

これらの課題を出すことにより、学生に死について時間をかけて考えてもらいたかった。価値観、生き方の見直しができ、死についての講義の理解に役立つだろうという理由でもある。また、死についてのアンケート(無記名)を授業中に記入してもらった。ここでは、課題(1)についての学生(102名)の回答を分類し、それについて考察をする。アンケートの内容・結果については付録として本稿の最後に掲載した。

あと2週間で自分の人生が終わるとしたら、あなたは何ををすると思うか

- |   |   |
|---|---|
| 1 | 人との交流：人と過ごす (52) <家族 (19) 友人 (10) 彼女 (8) 大切な人 (2)> 人に会う (17)                  |
| 2 | 人間関係： 感謝する (11) 思いやる (8) <親孝行 (6) 他 (2)> 愛の告白 (5) はっきりさせる (3) 仲直り (2) 仕返し (2) |
| 3 | 生きた証： 残す (6) 捨てる  |
| 4 | 整理整頓： 部屋 (5) 自分の身体 (2)  |
| 5 | 生き方の反省 (2)  |
| 6 | 具体的行動：旅行 (34) 食べる (23) 遊ぶ (13) 買い物 (9) その他 (7)                                |
| 7 | 何かをする：お金をおろす (10) 実現可能なこと (7) 自分の好きなこと (4)                                    |
| 8 | 生活形態：普通 (8) のんびり (3) 贅沢 (3) 笑い (2)  |
| 9 | 行わないこと：学校への登校 (4) 勉強 (2) バイト 何もしない  |

～具体例として～

#### 1 人との交流

「何をするか」との間では大切な人と一緒に過ごしたいが一番多い。理由は「ゆっくりしてられる」「心が落ち着く」「思い出を振り返ることができる」など、一緒に静かに最期を迎えたい気持ちがある。また、「少しでも覚えていてもらいたい」「忘れられたら

自分が生きてきたことが何の価値もなかったように思える」ので一緒に過ごす人もいる。

## 2 人間関係

世話になった人に感謝する人も多い。親に「心配ばかりさせてきたので家事をしたり、何でも手伝い」「大切にし」「安心させたい」という思いが強い。また、「人のことを考えられる人になれそう」「好きな人に尽くしたい」と、優しさが表われてくる人、「友達と仲直りをする」人、片思いの人に告白する人が5名。心残りがあるのは嫌だから「何もかもはっきりさせる」人、「嫌だった人に嫌がらせをし、我慢していたものを吐き出す」「自分を傷つけた人に同じ苦しみをさせる」と今までの恨みを晴らす人も2名。

## 3 生きた証

「自分がしてきたことを残す」「自分のことを忘れられたくない」等、生きていた証を作るため「写真を撮りまくる」人、子どもをつくり「自分の存在として残しておきたい」人、ビデオレターに自分のことを収めるという人もいた。家族・親友に手紙を書き、友人に会って「少しでもその人の中に私が残るように」との思いがある。逆に「親が思い出して悲しくならないように、自分を早く忘れるように」と生きていた証拠を捨てる人もいる。

## 4 整理整頓

「見つかったらヤバイもの」「人に見られたくないもの」があるため整理整頓をする人、「他人に迷惑をかけたくない」ので部屋の掃除をする人も5名。ある人は髪形を変え、化粧し、服を買い、「気分を変えて、さっぱりした気持ちで残りの人生」を過ごすと考える。

## 5 生き方の反省

「思い出深い土地を訪ねたら、大切な人に会いに行く。思い出を整理しながら自分の人生を終わらせたい。」別の学生は自分の人生がどういうものであったか反省し、「どんな人間であったにしろ、生きていられたのが幸せなことだと思って死にたい」と書いている。

## 6 具体的行動

「旅行をする」が一番多い。旅行先は、海外（5）、エジプト（2）、ハワイ（2）、オーストラリア、東京デズニーランド（2）、沖縄（2）、北海道、関西、南国、温泉、海、公園、夕日、夜景。旅行の理由は「生きてきた世界がどんなものだったか、納得しておきたい」、

海外に行きたい理由は「経験や知識が浅い。自分の知らない世界を見たい。地球に生まれたから地球を見たい」、エジプトで遺跡を見たい人は「読んだ知識と目の前にあるものを一致させたい」。「家にいてもつまらない」から旅行する人もいた。

二番目に多かったのが「食べる」こと。「世界三大珍味」「高級な料理」「食べたことのない料理」「好きなもの」を「体重を気にせず」、「食べまくる」こと。

「遊び（まくる・ほうける）」「（おもいきって・贅沢をして）遊ぶ」など精一杯遊び尽くしたという表現がいくつかあった。理由は「毎日何かに束縛されて、あまり楽しくない」「思い残すことがないように」。「お酒を飲んで、騒ぎまくる」理由は「人の為に財産を残すことはできない。自分が可愛いし、自分の人生だから、勝手な行動をとる。楽しい事を沢山しないと損をするという考えが期間が限定されればなお強くなる」。

「買い物」では服（8）／バック／化粧品／車。「前からほしかった服」を「買いまくる」。「服、バック、化粧品を買い、髪形を変え、彼氏にプロポーズする。」

その他は、歌を聴く／バンジージャンプをする／映画「シティ・オブ・エンジェル」を見る／絵を描く／サッカーの応援／コンサートに行く／スノーボード。

## 7 何かをする

「自分の好きなことする」「自分のために何かをする」「後悔しないように全てのことをやりぬく」「どうせ死ぬなら楽しいことをやりたい」「実現可能なことをする」。

## 8 生活形態

普通の生活：理由は「おいしい物をいっぱい食べ、貯金を使い果たすなど考えたが、今の生活に満足しているので、急に欲をだしても自分にはあわない」「いろんなことしてもどうせ終わる」「あの人は死んでしまうから、かわいそうにと思われたくない」「あせって何かしても無駄。いつもと変わらず家族と、好きな人と一緒に過ごし、お互い『今までありがとう』と感謝の言葉を交換する」。

贅沢な生活：「そうすることによって、死ぬという恐怖を忘れようとする。命が終わってしまうのだから、かなり自暴自棄になり、冷静な状態で生活はできない。」

のんびり：「いつも追われているから家族とのんびり過ごす」

笑いのある生活：「悲しむことなく、感動したり、楽しく笑いのある生活をしたい」「少しでも自分が幸せになれるように、笑い顔で死ぬるように」。

全体を通して：

初めの1週間は旅行をしたり、友達と一緒に過ごし、2週目は家族と家で一緒にいたい、という学生が多かった。「寝る間も惜しんで会話を楽しむ」「最後は家族と、一緒に夕食を食べる。できれば、長芋、納豆、野沢菜。みんな笑い顔で、たくさん話したい」。本稿の「はじめに」で触れたように、病院で死ぬ人が93%ある現代社会では難しくなってきたが、家族に見守られながら死にたいという思いが強い。

具体的行動では旅行をしたいという学生が一番多かった。彼女たちは自分の行動範囲が限られていることを自覚しているようだ。長期の休みもクラブ活動、塾等で時間が束縛されることにも理由があるのだろう。「食べる」「遊ぶ」が二、三番なのは、日常生活でいかに彼女たちが食べ物を節制し、規制された生活をしているかが伺える。

死に面した時に人間の本性がでるという。「後悔しないように全てのことをやり抜く。きっと自己中心的になるだろう」と書いた学生、又、記名にもかかわらず、正直に「自分勝手な行動をとる」「借金をして高いものを買いまくる。どうせ人生が終わるのだから自分には何も損はない」「お金がなくなったら、強盗する。必要なものを買込み、無人島に逃げて、人生の終りを待つ。」学生もいる。同時に、親孝行をする、他人に尽くす学生もいる。ちなみに、ソクラテスは死刑を宣告され、最期に望むことはと尋ねられると、借りていた鶏を返すように言ったという。

課題をまとめることで、学生の生き方や価値観を少なからずかいま見ることができた。また学生自身、死に面した時に自分はどのような行動をとるのかを考えることは自分の生き方を反省する上で有意義なことであったと思う。二人の学生のコメントである。「授業で人間について考えてきた。愛、幸せ、人間として生まれてきたことの意味、考えることができるからこそ相手を思いやることができるということ。人間でなければできないことは沢山ある。そんなことをして、残りの2週間を過ごしたい。それが人間として生まれてきた意味であり、人生ではないかと思う」「一日を大切に過ごしているのかと考えさせられた。今日できなければ、明日があるし、他の日にやればいやって考えている自分に気付いた。明日の事なんてわからない・・・私は“今・現在”についてもっと意識し、大切に過ごさなければいけないと考えた」。

## 2) 死を意識することの必要性

死を意識することで、その人の毎日の生き方に違いが出てくる。死についての教え、そして死に直面した人の言葉を学生に紹介した。

聖書には次の例えがある。「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は心の中で『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』』と思いめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉をとりこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食料を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。魂よ、おまえには長年分の食料がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ』。すると神が言われた、『愚か者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか。』」<sup>22</sup> 死を忘れた生き方、または忘れようとしている現代人にも当てはまる話である。

全ての人間は死刑を宣告されていることを忘れるなどパスカルは言う。我々の何人かは毎日死んでいくが、多くは自分の運命を忘れたかのように気晴しに、そして、おしゃべりにふけている。多分その方が幸せなのだ。しかし、人間よ、明日にも死の運命が迫っているのに、こんな空しいことにふけていてもよいのか、とパスカルは忠告する。<sup>23</sup>

ブッダは「死」を見て次のように考えた。「愚かなる異生は、みずから死するものであり、死をまぬかれぬ者でありながら、他の人が死せるを見ては、自己を忘れて慚じ嫌う。わたしもまた死なねばならぬ身であり、死を免れることを知らない。しかるに、みずから死ぬる身でありながら、他の人の死を見て慚じ嫌うということは、わたしに相応しことではない、と。比丘たちよ、わたしはかように観察したとき、わたしのあらゆる生命の驕逸は、ことごとく断たれてしまった」『中阿含経』。<sup>24</sup> 我々は人間の悲惨さを自覚せず、あるいは知りながらも目をそらして、楽しく毎日を過ごそうとする。汚いものには蓋をする発想である。若さ、健康、楽に生きることはすばらしいが、長くは続かない。ブッダは青春、健康、生そのものの価値も疑い、その反対の「生きる、病む、老いる、死ぬ」という人間の悲惨さを考えることで、青春・健康・生の価値を豊かにするのだと言っている。<sup>25</sup>

「馬も猿も自分の生きていることの意味を問わない。人間だけが何のために生き、どう生きるべきかを問う。しかし、現代人の多くは人間の本来の在り方を忘れ、他人に支配



され、人が生きるように自分も生きるようになった、墮落してしまっているのではないか」と、ハイデガーは警告する。<sup>26</sup> 我々は「みんなと仲良くしたい、仲間外れにならないように」と、他人を気使っているが、気を使わなければならないのは他人ではなく自分、その自分は死にかかわる存在である。死を考えないことで死から逃避できたと、自分に思い込ませるのではなく、死を積極的に受け止めなければならない。「君は死に向かう存在なんだよ」と良心が呼びかけるているのが聞こえないのか、とハイデガーは我々現代人に問い、この良心に目覚めて生きることにより、主体的な人間になるのだ、と説く。

実際に死に直面した人たちはどのように考え、どのような日々を送っているのだろうか。癌に冒された児玉隆也氏は毎日の生き方を『癌病棟の99日』の中で次のように表現している。「私には日めくりが性にあっている。一ヵ月単位や、まして一枚の紙に一年分を印刷したカレンダーは、健康な身には……便利だが、おびえを持っている人間には渡れば崩れ落ちかねないつり橋が見えてくる……私はその日めくりのような思いで生きている。」一日を、瞬間を精一杯生きようとしている気持ちが伝わってくる。

朝日新聞の記者が44人の死刑囚と面接をした。<sup>27</sup> 彼等死刑囚に共通しているのは感受性が鋭く、何を見ても聞いても、感動的に刻みこまれ、せわしい印象だったらしい。ある老人は俳句を20～30句もつくる。絵を描きまくる人、難解な本を読む人、等々。生活がハツラツして、一日が濃縮されていたという。死刑囚とは逆に、あまり死を意識しない無期囚は感動することもなく、芸術とは無縁で、塙の外の世界には興味を示さず、関心は守衛のご機嫌とり、ご飯のおかずが気になり、刑務所の役人に対しては、従順で、卑屈。いつかは死が訪れるにしても、殺されることはなく、日常茶飯事のことだけしか頭にない。芸術的な美、いかに生きるかといったことについては無関心であったという。

上述のように、学生には死を意識することで、毎日の生き方に影響し、ユニークな自分として、はりのある人生を積極的に歩むことができるんだということを学んでほしいかった。

### 3) 死後の世界の有無による生き方の違い

死後の世界の有無によって、人間の生き方が変わるのだろうか。古代ギリシャでは両方の見方があった。しかし、どちらの考え方においても、彼等は現世での生き方を否定せず、目的をもって生きた。学生にはこの二つの生き方を学ぶことにより、自分の今あ

る人生を見つめるように促した。

a. 死後の世界が無い場合

古代ギリシャにおいて、魂は“psyche（人間が吸い込む「息」）”であり、人間の死は肉体と魂の死でもあった。「神々の享受する不死の特権がない人間は死を癒し、老いを防ぐ手段を見い出すこともできず、愚かしく無力に生を過ごさねばならぬ惨めな運命をもつ」（『イリアス』ホメロス）。けれども、死が終りであるからこそ、力の限り生きたいと願う古代ギリシャ人は虚無的な生き方をするのではなく、人生の空しさとはかなさの故にいつそう熱烈な価値ある生き方をした。その結果、多くの歌劇・詩・彫刻などの芸術作品や競技を残し、人間の矛盾をあらわした悲劇、半分が神の顔、体が動物というスフィンクスをつくりだした。人生という戦争、競技場において、自分にとっての使命は勝負を逃げずに引き受けることである、努力しなければ生きていく価値がないと考えた。英語の“responsibility”は「責任」と訳されるが、二つの単語を合成している。“response”「反応、対応」と“ability”「能力」、すなわち、与えられたことに対して「対応」する「能力」があってはじめて人生に対して「責任がある」という単語の成り立ちは古代ギリシャ人の考えと一致する。

b. 死後の世界がある場合

もう一つの古代ギリシャの死生観は、死は魂の肉体からの分離であり、人間の魂は誕生とともに彼岸から現世に落ちて肉体の中に入り、現世で浄化された後、彼岸の世界に戻らない限り「運命の車輪」が回り続け、肉体の苦しみから抜け出ないという考えである。ソクラテスは「善く」生きることが、「善く」死ぬことであると言った。すなわち、人間にとっての最大の善は魂を気遣うこと、精神を優れたものになるように気を遣うことである。故に、人生で一番大切なことは魂への配慮であり、ただ生きることではなく善く生きること、そのためには自分の生活を反省し、吟味することが必要であると考ええる。

死を「この場所から他の場所へと住所を移すこと」と考えれば、胎児が子宮から出てくる過程に似ている。胎児として子宮での生活は終り（死）、空気の世界に居場所を移すことになる。胎児に思考能力があれば、「この狭く暗い子宮でどうして自分は手足・目があるのだろう」と質問するだろう。母親の栄養の取り方で、胎児の様々な器官の健全な発育に差が生じ、誕生後の生活に影響を及ぼす。今度は赤子が成長する過程で人間に

特有な理性、善悪を判断する思考能力も発達し、人格も形成される。思考できる人間は「なぜ自分には理性・思考能力があり、人格形成が必要なのか」と問うこともできる。この空気の世界から離別（死）したときに、胎児の肉体の器官が空気の世界で必要であったように、次の世界でこの理性を必要とするかもしれない、という類推もできる。胎児にとって「良い栄養をとり」、健康な赤子として生まれるという観点と、ソクラテスのこの世で「善く生き（魂を浄化して）」、清い魂として次の世界に生まれるという観点は類似する。

日本古来の死生観の一つにも、死は魂が肉体から離れるという考えがある。遺体は「亡骸＝なきがら」と呼ばれる。すなわち、魂がない抜け殻である。魂は別の世界で生きる。サンスクリット語から由来した「往生」の意味は「往」は「～に向かって行く、ある状態に入る」、「生」は「生まれる」、すなわち、安楽世界を目指して「往き」、そこに「生まれる」ということで、「死」という意味が入っていない。

生物の細胞は絶えず死と再生を繰り返す。その細胞で作られている人間もその可能性があるのだろうか。

## おわりに

デーケン氏の言う如く、人生最大の試練である死に対して、何の準備もないのはおかしい。入学・就職試験、様々な免許・資格の試験、結婚のためには時間をかけ準備する。しかし、我々が受けてきた教育・訓練は肉体的に自分や家族を養うための職業人としてのトレーニング、社会人としてスムーズに生きる基礎知識のための教育が主なようで、「成長すべき人間として生きる職業」の為のトレーニングがあまり行われてこなかったのではないか。生物の死とは成長が止まり、腐敗していくことである。人間の肉体的成長は20代前後から退化し、記憶力は13歳頃を境に衰え、理解力・判断力は40代頃から増して、やがて悪くなるという。一生懸命勉強し、いい学校・会社に入り、一生懸命働いて家を建て、自分・家族を養う。子どもも同様なプロセスを辿る。すると、我々は何の為に生まれ、死んでいくのかという疑問も湧いてくる。アリストテレスによると、ものの本質は4つの質問に答えられれば理解できるという。形相因（これは何か＝名前）、目的因（何のためか＝目的）、質料因（何でできているのか＝物質）、動力因（だれがつくっ

たのか＝創作者)。椅子、机、コンピューターなど身の回りのものについて質問すると、確かにその本質を知ることができる。人間、自分に当てはめてみると答えはどうなるだろう。この質問に答えること自体が、「死に向かう」我々人間の生きる意味を考えることになるのではないか。

人間の肉体、記憶力、理解力、判断力は衰える。では、残るものがあるのだろうか。授業を履修した学生の半数近くが考えているように、死によって全ては終り、消滅するのだろうか。<sup>28</sup>「生命のない状態が死であり、後は無だ。闇はもともと存在しないのであり、存在するのは光だけ。光のない状態が闇であるのと同じように、生命のない状態が死である。死とはその意味において、生命との別れの状態をさす。」これは癌で何回もの手術を受け、死を考え続けた宗教学者、岸本英夫氏が行き着いた死についての考え方である。(『死を見つめる……ガンと戦った十年』)<sup>29</sup> ドストエフスキーの著『カラマゾフの兄弟』の中でゾシマ長老は「不死を証明することは誰にもできません。けれどもあなたが愛において進歩なさるなら、それにつれて神の存在や魂の不死についても確信できるようになるでしょう」と来世を疑う女性に答える。ドストエフスキーは自分が死刑を宣告された経験をもとに、死後の世界は理論ではなく、隣人愛の実践を通して認識され则认为る。<sup>30</sup> 筆者が学生時代に一緒に過ごした80歳の老女は家の中や周り以外は歩けない。昔のことは覚えているが、最近のことはすぐ忘れる。しかし、彼女には定職がある。いつも子供と孫の健康と幸せを思い、神に祈っていた。それが自分が存在している理由だと考える。体の衰えと反比例して彼女の子どもたちに対する「思い」は90歳で亡くなるまで増し続けた。

死とはこの人生におけるある意味での終末である。何人かの学生も死のイメージとして「最期・終末・人生のゴール地点・人生の終着点・終着駅」をあげた。終末とは英語ではターミナル、その語源のギリシャ語はテロスで、終末や目標という意味だけではなく、完成、成就、統合、成熟が含まれているという。実存主義哲学者ガブリエル・マルセルは人生における成熟とはわがままで無責任な自己を乗り越え、より高い精神的次元に到達することであると定義している。<sup>31</sup> 死後の世界の存在の有無に関わらず、この世界で人間として果たさなければならないことがあるようだ。このマルセルの言葉には、我々の一生を全うするために大切な意味が含まれていると思う。

本稿「I」で触れたように、幼児期にすでに、動物・人は死ぬということを理解し、悲哀を経験し、身近な人の「死」を否定するまでになる。アンケートに回答した学生の80%以上は死を真剣に考えたことがある。しかし、死を考えるきっかけ、また、生と死について家庭・学校でどのように教育されてきたか、または、何もなされてこなかったかは、各学生により様々である。毎年、数名の学生が次のようなことを述べる。「死、生き方について真剣に話そうとすると、友人や家族から『ちょっと考えすぎよ』『あなた、へんじゃないの』と言われ、そんなことを考えるのはいけないのかと思った。しかし、このような授業があり、安心した。」多くの学生が死を意識し、考えたとしても、それを話し合うような状況、学ぶ機会が少ないようである。5年前に本学で初めて教えた『人間と哲学』では「人間の存在意義」を哲学史を通して考察した。その後、できるだけ学生の日常生活に関係する事柄を取り扱っていくようにシラバスを変えていった。幸せ、愛、いじめ、卒業後の仕事（生き方）、そして死。初年度は数名の受講者であったが、学生の数も増えていった。「生き方、死」を聞く、話す、考えることは多くの学生が求めていることであるようだ。そのような機会をこの科目で与えることができ、よかったと思う。死の準備教育の目的とは「生と死の意義を探究し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得する」ことであった。「死についてあなたが思うことを自由に書きなさい」という課題で一人の学生が次のように書いてきた。この授業が彼女の「生と死の意義」を探究する手助けになったことを切に期待する。「どうせ死ぬのに、どうして生まれたのかも分からない。今、自分のしていること全てが無駄な抵抗なのかもしれない。死んでしまったら何もなくなる。人はたくさんいても、自分の存在を知る人間はそれに比べればほんの少し。自分に身内も知り合いも全くいなければ、生きていても死んだと同じ。そう考えると自分はもう死んでいるのかもしれない。」

1 柏木哲夫『死を学ぶ』（有斐閣 1995年）pp. i ～ ii。

2 アルフォンス・デーケン「死への準備教育の意義」、アルフォンス・デーケン／メヂカルフレンド社編集『＜叢書＞死への準備教育 第1巻「死を教える」』（メヂカルフレンド社 1996年）p. 2。

3 同上、p. 2。

- 4 柏木哲夫『死を学ぶ』、pp. 4～5 参照。
- 5 同上、pp.11～12参照。
- 6 坂上正道「教師教育」『＜叢書＞死への準備教育 第1巻「死を教える」』、p.143参照。
- 7 御厨良一『哲学が好きになる本 '96年版』（エール出版社 1996年）p.18。御厨氏が引用した文は『中央公論』（1995年6月号）での青木保氏の発言について言及している。
- 8 御厨良一『哲学が好きになる本 '96年版』、pp.18～19参照。
- 9 宮本佑子「幼児教育と両親の役割」『＜叢書＞死への準備教育 第1巻「死を教える」』、pp.64～82を参照。都立教育研究所相談部旧児童生徒研究室が行った子供の「生と死」に関する意識の調査資料（昭和56年）を宮本佑子氏がまとめたものを参照した。調査対象は幼稚園児（5歳）の82名。本稿でのパーセンテージの数字は四捨五入で記入した。
- 10 稲村博「小学校教育」『＜叢書＞死への準備教育 第1巻「死を教える」』、pp.85～92参照。前述の子どもの「生と死」に関する意識の調査資料を稲村氏がまとめたものを参照した。調査対象の小学生（1年生から6年生）は計1205名。
- 11 平林進「中学校教育」『＜叢書＞死への準備教育 第1巻「死を教える」』、pp.99～108参照。データは1976年11月に小学館編集部が調査した資料に基づく。調査対象は中学生（男子399人、女子372人）の計771人。
- 12 宮本佑子「幼児教育と両親の役割」、pp.79～80参照。
- 13 稲村博「小学校教育」、pp.93～95参照。
- 14 平林進「中学校教育」、pp.105～109参照。
- 15 河野博臣「高等学校教育」、p.122～125参照。
- 16 諸富祥彦『自分を変える＜哲学＞』（教育開発研究所 平成8年）pp.56～59参照。
- 17 朝日新聞朝刊1997年10月1日3面「懲役13年」。神戸市の連続児童殺人事件で逮捕された15歳の少年（当時14歳）が書いた「懲役13年」と題する作文の一部である。
- 18 C.S. ルイス、森安綾・峰谷昭雄訳『悪魔の手紙』（新教出版社 1994年）p.57。
- 19 箴言24章3～5『聖書』。
- 20 朝日新聞朝刊1994年12月5日3面「大河内君の遺書全文」（大河内清輝）。
- 21 エーリッヒ・フロム、日高六郎訳『自由からの逃走』（東京創元社 平成6年）pp.156～158参照。
- 22 ルカによる福音書12章16～20『聖書』。
- 23 梅原猛・橋本峰雄・藤沢令夫編『哲学のすすめ』（筑摩書房 1994年）p.25参照。
- 24 御厨良一『マンガ・哲学って何だろう '93年版』（エール出版社 1993年）p.96参照。

- 25 同上、p.97参照。
- 26 同上、p.91。
- 27 同上、pp.128～130参照。この段落は御厨氏が載せている新聞記事を筆者が要約した。
- 28 本稿掲載の付録「死についてのアンケート」参照。
- 29 御厨良一『哲学が好きになる本 '96年度版』、p.19参照。
- 30 アルフォンス・デーケン「教材としての文学」『＜叢書＞死への準備教育 第1巻「死を教える」』、p.260参照。
- 31 平山正美「生と死を考える」、A・デーケン／曾野綾子編『生と死を考える』（春秋社 1994年）、p.183参照。

### 付録： 「死」についてのアンケート

調査対象：本学の共通教育科目（選択）「人間と哲学」の履修者女子99名（18～20歳）

調査期日：2000年1月20日 記入時間：20分 無記名で記入

質問内容：

- 1 あなたが持つ「死」についてのイメージはどんなものか（複数回答可）
- 2 今まで死について真剣に考えたことがあるか：ある ない  
 あると答えた人に質問します：いつ頃から、何がきっかけで  
 ないと答えた人に質問します：考えない特別な理由があるか、あったらその理由
- 3 死後の世界は存在すると思うか：思う 思わない  
 思うと答えた人に質問します：いつ頃からそう思うようになったか、どうして死後の世界が存在する  
 と思うようになったか（具体的な例）  
 思わないと答えた人に質問します：思わない特別な理由があるか
- 4 死後の世界が存在したほうがいいと思うか：思う 思わない その理由
- 5 霊（いわゆる幽霊、先祖の霊など）が存在すると思うか：思う 思わない その理由
- 6 この宇宙を創造した「創造主」、いわゆる「神」は存在すると思うか：思う 思わない その理由
- 7 この「創造主」、いわゆる「神」が存在して欲しいか：欲しい 欲しくない その理由
- 8 もしこの「創造主」が存在するとしたら、その「創造主」にどんな質問をしたいか（複数回答可）

回答：できるだけ学生の言葉をそのまま使用するようにした。同じ意味合いが含まれている場合は紙面が限られているので割愛した。「複数回答可」と指示がない回答でも複数回答がある箇所はそのまま数えた。

#### 1：死のイメージ

分類	具体例
情緒的（57）	怖い（30）／恐ろしい（7）／悲しい（9）／辛い（2）／孤独（8）／切ない
感覚的（18）	楽になる（7）／安らぎ（4）／苦しい（3）／冷たい（4）
色合い（13）	暗い（8）／黒（3）／暗黒／明るい
自然／必然的（11）	誰にでも必ず訪れる（3）／いつかはやって来る（2）／老いたら訪れる／絶対にある／必然／避けられない／あたりまえに来る／自然
消滅／無（23）	存在しなくなる・消える（9）／肉体の死（3）／精神の死／記憶が無くなる／人の想像の中だけで生きる／何も見えない（2）／無（6）／灰
別離（6）	永遠の別れ（2）／別れ（2）／2度と会えない（2）
終り（16）	終わる（11）／最期／終末／人生のゴール地点／人生の終着点／終着駅
始まり（5）	第二の人生（2）／出発点／旅立ち／入り口
他の世界（15）	未知・別の・遠い世界（8）／天国（2）／天国か地獄／真っ白な世界／雪の上／雲（2）
その他（21）	忘却（2）／魂（2）／逃避（2）／思考なしの世界（2）／死人／不幸／絶望／絶対に来てほしくない／残された人に大きなものを与える／古い／複雑／生と紙一重／予告なしで来る／眠りにつく／解放・肉体からの離脱／花畑で天使と遊ぶ



2：死について真剣に考えた：ある（81） ない（18） 無回答（1）

考えた時期：もの心がついた時（1）／小さい頃、はっきりは不明（3）／3歳（1）／小学校（28）／中学校（25）／高校（12）／短大（2）／最近（3）／忘れた（2）

考えたきっかけ：身近な人の死（39）／ペットの死（8）／人間関係（11）／病気（4）／テレビ等のマスメディア（5）／その他（10）：夏休みの宿題が終わらない／苦難に陥る／色々な事が嫌になる／深く考え込む／空しい気持／面白くない／やりたい事ができない／自分が生きてると実感／車の免許取得後／失恋  
考えない理由

当分先（5）：自分が死ぬことなんて考えられない／まだ死なないだろうと思いついて（まだ死ぬ年齢ではない）／まだ真剣に考えたくない

恐ろしい（2）：いずれ来るものだと思うと怖い／真剣に考えようとしたけど怖くなった

その他（4）：死について深く考えるほど、死にたいと思ったことは無い／自分はいつ死ぬかわからないし、何か現実感が沸かない／どっちみち人間は死ぬから／答えがでない

3：死後の世界は存在する：思う（64） 思わない（31） 分からない（3） 無回答（1）

思った時期：3歳（2）／6歳（2）／小さい頃（12）／もの心がついた頃（10）／小学（8）／中学（10）／高校（7）／祖母の死（2）／天国のことを聞いて／今／知識を持って／覚えていない（4）／無回答（4）

思うようになった理由

テレビ（16）／本（9）／人（9）：人形劇「くもの糸」／「死後の世界」等の特集／丹波哲朗の大霊界の話／水木しげるの作品／お寺のあの世の絵／エジプト史／小学校の教頭先生、お坊さんから聞いた

願望（10）：幸せが待っていると思いたい／生まれて死んでそれだけでは空しい／身近な人が自分を見守ってほしい／気持ちが悪くなる／自分の存在が消えるのは怖い／死と直面することができる

霊／精神／魂の存在（9）：肉体が減びても精神、心、魂は減びない／魂は残り、生きている人を守る

自分独自の理論（7）：存在しないとは言いきれない／この世での生き方が死後の世界に影響する／生の世界があるのだから、死後の世界もある／それで終わりというのはない

棺桶に物を入れる習慣（2）：死後の世界に行っても楽しめるようにとの心がけ

思わない理由

すべて消滅（6）：肉体は消えてなくなるのにどこにそんなものがあるか／埋葬や火葬で体は土の中にあたり骨だけになる／魂は死後に消える／死んだらすべてそこで終わり

見たことがない／想像不可能（5）：想像できない／実際に見たことがない／聞いたことがない／考えても答えがでない／死後の世界へ行った人に会ったことがない

願望（3）：死後も生きたくない／死んだらそこで全てが終わってほしい

生まれ変わり（3）：人は生まれ変わる

人間の想像（2）：天国と地獄は人間が考えたもの／地球上にそういう場所があるとは思えない

わからない：死んだ後のことは分かん／考えられない。死んでみないと本当にあるかどうかわからない

#### 4：死後の世界が存在したほうがいい：思う(61) 思わない(33) どちらでも(4) 無回答(1)

##### 思う理由

新しい生活ができる(12)：人生が終わったわけではないと思える／第2の人生だし、天国で暮らしたい／楽しみたい：やり残した事をやる／生まれ変わって、また人間として生きたい

存在しないと悲しい／寂しい(9)：独りぼっちになる／そのまま終わるというのはあまりにも寂しすぎる／なにもない、どこへも行けないなんて、寂しい、悲しい

自由／楽しい／楽(6)：辛い事や人の為に人生をかけて頑張った人は、ゆっくり休んで、楽しく過ごしてほしい／自分がいなくなるという事実は耐えられない：新しいスタートとして、存在した方が楽しい

いき場所があった方がいい(7)：なかったら私はどこへ行ってしまう？／行き場がないのは可愛そう／自分が存在する場所がほしい／何もなくなっちゃうのはつまらない

恐怖心が消える(7)：ただでさえ、恐怖感があるのに、死んでどうになってしまうか分からなかったら更に増す／天国があるのなら現世で誰もがいい人間になり、戦争や殺人はなくなる。そしたら、死も怖くない

再会できる(6)：自分より先に死んだ大好きな人にまた会える

安心できる(3)：心が救われる／死後住む場所があると残された人は安心する

その他(9)：神のもとへ近づきたいと願う気持ちが人間のパワーになる／私は消えても魂は生きてほしい／私のままでいたい／人生のまとめができ、人生の意味がわかる気がする／自分の存在した事を考えられる／地獄ならいやだけど／空を飛んでみたい／その世界は平和で、誰もが知り合い。ちょっとあこがれる

##### 思わない理由

この世界だけで十分(12)：精一杯生きた後、あの世でも生きたいとは思わない／死後も自分が存在するなんて嫌だ／死んでも縛られるなんて嫌だ／私という存在のままで生きているのは疲れてしまいそう／悲しく孤独なので、第2の人生はもうやりたくない／死んでもなお辛い思いはしたくない

すっきりする(9)：全て無になるべき／何もかも終わった方がすっきり／生きてた時楽しい事があったとか、暗い気持ちでいるのはヤダ／ややこしいし、死後の世界まで人間的なものがあると死んだと思えない／悪い過去を忘れない、良い過去でも未練があるなんてイヤ／周りが自分の存在に気付かないのはじれったい

生まれ変わりたい(3)：生まれ変わって新たな人生を歩んでみたい／空白になってやり直したい／人生もう一度やり直したいと思っても、死後の世界では自分はもう自分でない

自分は天国に行けない(2)：天国に自分に行けるとは思えない／ちょっとした事でも悪い事をする在地獄生きたというのを聞いたことがあり、私は天国へいけないさそう

その他(5)：今の人生適当に生きる人が出てきそう／今、私がしている悪いことや、嘘をすべて見通されている気がして嫌だ／そこで何ができるのかわからない

#### 5：霊が存在する：思う(84) 思わない(13) 分からない(2)

##### 思う理由

人の話／テレビ／本(39)：霊が見える、靈感の強い人がいる／知人が霊(顔)を見たなど色々な体験談を聞いた／心靈写真などを見てしまうと、信じざるを得ない

守られている気がする(15)：事故で死ななかったのは、先祖が守ってくれた／高校に入学できたのは祖

父のお陰／大変な時はきっと助けてくれる／一番近くで私たちの幸せを願ってくれている

そばにいたいような感じ (13)：一人でいる時誰かの気配を感じる／時々そばにいたいようで恐ろしくなる／お墓に行くといふような感じ／お盆には先祖がこっちにいたいような気がする

魂の存在 (10)：心、気持ち、魂、霊は不滅／人の念、気持ちがその場所に宿っている

自分の経験 (8)：火の玉を二度みた／霊を見たことがある (4)／嫌な体験をした (3)

お墓参り (7)：「仏さんのおじいちゃんにお参りしようね」と育った／送り盆、迎え盆で先祖の魂・霊を迎えに行く／祖先の霊が存在しないのならお墓参りする意味がない

願望 (4)：見たい／祖父母が見守ってくれている気がするし、見守ってほしい

不思議なことがよく起きる (3)：科学の力だけでは解明できないいろんな不思議な何かがある

理論的 (3)：存在しないともいえない／目に見える物だけが真実だとは限らない：人間だって本当の気持ちを隠す／もとはこの世界にいたのだから幽霊がいても不思議じゃない

#### 思わない理由

見たことがない (8)：実際見たことがない／会ったことがない

恐怖 (4)：祖先の霊は存在してもいいが、幽霊は怖いので、思いたくない／想像する事も嫌：霊は悪さをするイメージがあるから存在しないと思いたい

その他 (2)：いたらすごい／ただ信じられない

#### 6：創造主は存在する：思う (52) 思わない (38) わからない (8) 無回答 (1)

##### 思う理由

創造主を考える以外にない (21)：自然に人間が生まれたとは思えない／創造者がいなければなぜ私たちはここにいいのか／神がいなければ今の世界の状態は説明がつかない／普通では理解できない大きな存在があるのではないのか／創造主が宇宙を手中で扱っている気がする／世界を取り巻く何か強いものがある

安心 (4)：精神的に安定できる／不安や苦悩がなんらかのかたちで取り除かれる

人間が祈る理由 (4)：最終的に祈ったり、願ってしまう／いざというとき‘神頼み’ができる／宗教団体が存在するのは神が存在するから。神を信じて私たちは祈っている

何となく (4)：どことなく信じている／なんかいふような感じ。私たちがいつも見ている気がする

あまりにも偶然過ぎる (3)：こんなすごい地球が、ほんとあるとは思えない／地球ができ、人間が生まれることはあまりに偶然過ぎる／偶然にしてはできすぎている

意味論から (3)：いないのなら、この世界も私たちも意味なく存在している／いなかったら、なぜ私たちは「神」という言葉を思いついたか／存在しないと思った時点で、この宇宙の存在意味や価値がなくなる

奇跡 (3)：奇蹟が起こる／神を信じれば、不思議なことが不思議じゃなくなる／科学的なものを見ると思わないが、不思議な物を見ると（奇蹟）いると思う

願望 (3)：神がいてほしい：いることを信じたい／存在しないって思うとなんだか寂しい／目には見えないからわからないけど、存在していると信じたい

その他 (5)：創造主はいると思うが、神とは思わない／一人一人のなかにいると思うが、創造主だとは思わない／宇宙の限りない広さの中には存在する／私やみんなが生きている／キリスト教を学んだ

思わない理由

人間の創造物(8)：架空の人物／聖書の天地創造は作り話／人間の創造物。いるわけない／困った時に「神様」って思うが、それは気持ちの問題

科学的根拠がない(3)／見たことがない(3)：実際に会ったこともない／今神はどこにいるのか  
宇宙は自然にできた(6)：何らかの奇跡が集まってできたもの

祈りが叶わない(4)：神に助けてもらった感覚がない／私の祈りが叶わない／神に何かしてもらったという話を聞いたことがない

神がいたらもっといい世界(3)：存在するならば地球の環境問題をなんとかするだろう／戦争やたくさんの人(子供など)の血は流さなかった／世界はもっと平和だと思う

その他(7)：神はだれが作ったのか／宇宙を作ったとは思えない／誰かに作られたとは思えない／宇宙を造れるような人がいるのか／神の存在が私の生活に関わることはない／自分の人生を神にゆだねる気はない／神がいっぱいいて信用できない。いるとしたら一人。キリストとかアラーとか、うさんくさい

7：創造主が存在して欲しいか：欲しい(71) 欲しくない(21) 両方(2) わからない(4) 無回答(1)

欲しい理由：

心の支え(15)／すがりたい(4)：神を頼って生きがいにしている人もいる／何かに頼らなければ人は生きていけない／すがる物がなくなりみんなが狂う恐れがある／挫折した時すがるのがあれば、救われる  
助けて欲しい(16)：「神様助けて！」と叫んでしまう／神様なしでは私は生きて行けない／自分を正しい道へ導いて欲しい／助けて欲しいと思った時、祈る。神がいなければ何を信じていいのかわからない

落ち着く(6)／安心する／楽になる

何かが変わるかも(8)：神に近づこうとして、よい人間になろうと努力する／強く生きられる気がする／上から色々調節して欲しい／大災害、全世界の不平等をなくして欲しい／もっと地球を幸せにして、悲しいことを減らして欲しい／神様がいなくなったら、この世界はダメになる気がする怖い

願いを叶えてくれる(7)：願い事を叶えてくれるなら実際に見てみたい／何かあった時、神に祈ってしまうから叶えて欲しい／自分の欲を満たしてくれるなら存在して欲しい

見守ってくれる人が欲しい(3)：自分の事を見ていて欲しい。そうすれば悪いことはできないと思った  
り、良いことをしても神様は見えてくれると思う。私の力となる

生きる意味(2)：いてくれないと、自分の生きている意味が分からなくなる

その他(8)：信じるものが欲しい／神は誰にでも平等／自分や生き物にとってよい存在であって、なければならぬ／その方が説明が簡単／唯一絶対があってもいい

欲しくない理由

頼り過ぎる(7)：何もかも頼ることになる／神にすがり、自分を見失った人々を見てきた／悪い事を神のせいにする／余計な迷惑をかける／神に従うのは嫌：自由でありたい／神の意思で世界が左右される

存在しても変わらない(4)：「今さら」っていう気持ち／全ての人の願いを叶えてくれるわけでもない／いても何かが変わるとは思わない。存在して欲しいとも思わない

見られるのは嫌(3)：人の心を読まれて、見張られているようで嫌

恐ろしい（3）：人間の悪い行いを見て、怒りで地球を破壊させることもできる恐ろしい力の持ち主の存在は怖いから／神によって宇宙、人間、動植物が左右されるとしたら恐ろしい／おもちゃみたいに扱われそう  
その他（5）：「存在」することで威厳がなくなりそう／神にも限界が来るし、そのために絶望したくない／今のままがいい／いて欲しくない／ピンチの時すぎることもある。でも、本当にいたら困る  
両方：今、自分が生きているだけで感謝

## 8：創造主への質問：

創造主について（29）：何の為に存在するのか／我々に何を望むか／どこから来た？／どこにいるの／創造主ってどんな気持ちか／人間の姿なの／とりあえず会ってみたい／みんなからお願い事言われて大変じゃないか／今何を見ているのか／全ての人々を見ているのか／何か食べてるの／悪い事を考えたことがないか／何かに頼りたいと思う時はないか／人間は好きか／今の宇宙、人間で満足か

自分の将来（14）／自分が生まれた理由（8）／自分のこと（5）：どう生きれば一番良いか／私の運命はどうなるか／結婚をしているか／就職先は決まっているか／幸せな時は来るか／いつ頃死ぬか／なぜ悩まなくてはならないの。私がいなくても誰も悲しみはしない。生きている理由は何か／私は良いところがなく、神様の存在を伝える能力も、勇気もないだめな人間なのに、なぜこの世に誕生させたのか。誰のために何の役目を果たせばいいのか／私にしかできないことがあるのか／どんな人間と思われているか／悪い子か良い子か／私のしてきたことを見てきたか／私の生活、考えていることがすべて分かるのか

宇宙を創造した理由（20）／宇宙を創造した方法（8）：なぜ人間をつくったか／なぜ男と女をつくったか／なぜ宇宙を創造したと思ったか／どうやって宇宙を造ったか／地球に生物を誕生させた方法

死後の世界（11）：死後の世界はあるか／なぜ死があるか／死後も苦しいことがあるか／永遠なのか／死んでも幸せか／天国と地獄はどうなっているか／天国には私の知っている人もいるか／生まれ変わるか

過去・未来（9）：これから人間をどうする予定／日本はどうなるか（大丈夫か）／地球は滅びるか／宇宙はどうなっていくか／宇宙の歴史

地球以外の星に生物がいるか（3）：どうして私たちが住めるのは地球だけなの？他の星も地球みたいにしてくれればよかった／地球以外に生物の存在する星は？

平等（16）：なぜ幸せな人と不幸せな人がいるか／なぜ美人不美人を作ったか／なぜ人間は平等でないか（8）／何でも様々な人種がいるか／何でもお金のある人ない人がいるか／なぜ人間には良し悪があるか

悲惨な事が起こる理由（7）：なぜ災害を起こし、殺人をやめさせないのか／人はなぜ傷つけあうか／なぜ人間を地球という広い庭に野放しにしておくか。観察して楽しんでるのか／人間が争わない方法

幸福（3）：幸福とは何か／自分が幸せになる道とは／どうして辛い事ばかりするのか。幸せよりも不幸の方が多いような気がするが、どうしてもっと人々に幸せを与えないのか

～をどう思うか（2）：今の日本や世界をどう思うか／世界大戦をどう思ったか

その他（9）：なぜ努力は報われないか／なぜ願いを叶えないのか／人間にとって何が良い事で、悪い事か／宇宙に果てはあるか／科学で説明できないことは何か／聖書やお経を作った人は誰か／アトランティス大陸はあったか／4大文明に高度な技術を伝えたのは宇宙人か／なぜ食事しなければいけないか